

大阪市大家政

藤田 弘子

谷 嘉代子

平野久美子

1. 児童の発達研究は、縦断的な把握が重要である。乳幼児期に、しばしばみられる発達遅延や早熟が、正常発達上の一過性のエポックであるのか、恒久的な意味をもつかは、数年後の状況と比較しなければ正確に判定できない場合がある。また、身体発達と精神発達が、個体によりいくぶんずれのある例を経験する。こうした相関的な発達のひずみが、正常児において、いかに現われるかを知ることは、乳幼児期の発育遅延児を診断する上にも、重要な課題である。

2・3. この研究は、昭和39年8月に発足し、正常児12名（新生児から3歳に成長したものを含む、延47例）について約半年毎に Follow up した結果を、まとめたものである。対象児の選定は、正常分娩、生下時体重2,500g以上の第1子または第2子で、両親健在で、この長期研究に従う条件を備えているものとした。これらの各個例について、同一研究者が、同一検査目的に従って、そのひずみをたどりながら、身体面、精神面、社会面から発達段階を観察し、立体的に把握しようとしてきた。研究(I)においては、主として身体的発達を中心に考察を行なう。主な項目は

①医学的身体所見

②手根骨レントゲン検査

③細部身体計測（マルチン計測器による）

④研究（II）に報告する精神的、社会的発達面との相関。